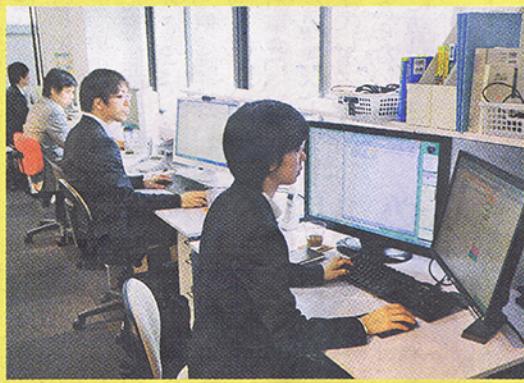


東日本大震災 人的・物的支援に仲介サイト



上 「必要物資・支援要求マップ」上に図示される書き込み（ホームページから）

下 物資やボランティアのマッチングを分かりやすく訴える「ボランティアプラットフォーム」の画像（ホームページから）



被災者支援サイト「ボランティアプラットフォーム」を運営するスタッフら
＝東京都新宿区

被災者支援サイト「ボランティアプラットフォーム」を運営するスタッフら
＝東京都新宿区

被災地での泥かきなどパワーの必要性を訴える。各団体の活動には「下火になつた」という感覚はない」とした上で「支援を続けてゆくことをきちっとメッセージとして発信することが重要だ」と指摘した。

地図上に“声”メールで交渉

「ゴールデンウイークを過ぎ、泥かきなどに当たるボランティアが少なくなつたという声を耳にするようになつた。東北学院高(仙台市)の同級生と手分けして避難所などを自転車で回って引っ越しする人々からは移

た末永伸太郎さん(17)が話す。

発生当初と比べ物資は出回った感があるものの、依頼された野菜類は足りない

東京都練馬区のウェブデザイナー田原大生さん(29)が運営する「ボランティアプラットフォーム」上に図示される書き込み

末永さんが足で稼いだ情報が反映されるのが「必要物資・支援要求マップ」だ。

東日本大震災の被災者が必要とする人的・物的支援を迅速にタイミングよく提供したい。被災地と、物資などの提供を申し出る人々をマッチングさせるインターネットの仲介サイトが注目を集めている。遠く離れた地域からも、被災者目線で救いの手を差し伸べることが可能だ。長い道のりとなる復興を継続支援するため、きめ細かな情報発信やニーズの掘り起こしに一役買っている。

(東京支社・宮田佳成)

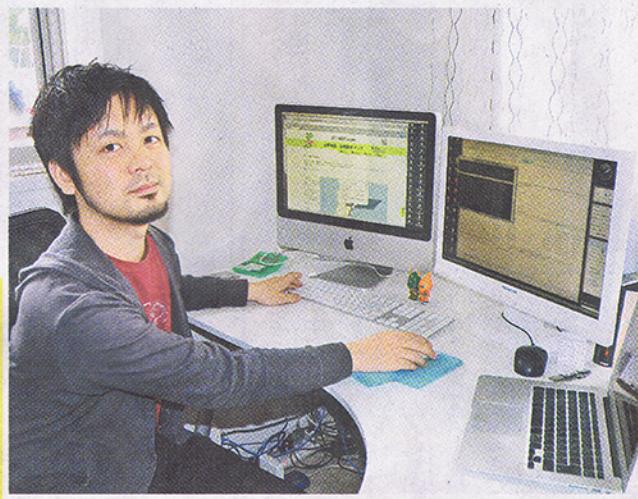
泥かき、学用品…多様なニーズ迅速に

イナーフィールド大生さん(29)が運営。ネット地図上に被災者の求めが図示されると、全国から申し出が書き込まれ、メールで双方が直接やり取りする仕組み。「地図での書き込みがあり、100件超がマッチングしたとみられる。田原さんは「一番大事なのは現地の声。被災地の情報発信し続けなければ、息長く活用してもらえるはず」と語る。

これまでに計約900件の書き込みがあり、100件超がマッチングしたとみられる。田原さんは「一番大事なのは現地の声。被災地からの要請がリストに掲載されると、支援申請が殺到。現在も1日平均150件が寄せられ、70件がマッチする。運営する「国際協力NGOボランティアプラットフォーム」(東京都新宿区)の福島慎之代表は「機会を逸した支援では効

果が薄いので、スピード感が重要」と訴える。

ネット環境が整っていない被災者は、携帯電話からアクセスできる。周知用のチラシを作成し、現地に赵り起こしを続ける必要がある。粘り強く活動を続けたい」と意気込む。



必要物資・支援要求マップを運営する田原大生さん
＝東京都練馬区

マッチングには官公庁も取り組む。文部科学省は被災地のニーズと、提供できる学用品や人材派遣を相互に一覧できる「子どもの学び支援ボーナルサイト」を初めて稼働させた。

インターネットが利用できない被災者向けに専用の相談ダイヤルを設け、寄せられた内容はポータルサイトの職員6人が入力。500件を超える支援の申込があり、一部実現を含め40件が成果となつた。同省政策課の斎藤憲一郎課長補佐は「非常に効果的だと実感している」と話した。

継続的な支援について、被災地での泥かきなどパワーの必要性を訴える。各団体の活動には「下火になつた」という感覚はない」とした上で「支援を続けてゆくことをきちっとメッセージとして発信することが重要だ」と指摘した。

被災地と提供者結ぶ